北米俳句の一世紀
レニア吟社の歩みを中心に[1]

粂 井 輝 子

1）問題の提起

ホトトギス社のホームページ、「ご挨拶」によれば、「真の俳句とは、ベテラン、初心者を問わず、四季を愛でる日本人の心があればどなたでも素晴らしい作品を生み出す事が出来る」のだという[2]。日本伝統俳句協会の「俳句へのお誘い」のページを見ると、「五七五で表される俳句はその小さな体の中に大きな宇宙を持って」おり、「花鳥風月の運行を諷詠することで人間の存在を自然との関わり合いにおいて再認識させてくれます」ものだという。同ページは、さらに続けて、「五七五で表される俳句はその小さな体の中に大きな宇宙を持っています。そしてその俳句の特徴として季題とよばれる季節の言葉を入れるというきまりが日本の固有の文化・情緒を表現する大きな役割をしているのです」と解説している[3]。そして、「私たちは」のページで、「私どもは日本古来からある伝統的なリズムを守る俳句、そして日本での人間と自然界の風物との脈々たる係り合いを詠う俳句、つまりは花鳥諷詠を基礎とした俳句を拠り所にし、そしてその中には人間界の営みも広く包含する新しく、しかも伝統的な俳句についての活動を目指しております」と主張している[4]。

以上をまとめると、俳句を作る上で大切な要素は、第一に「四季をめでる日本人の心」である。加えて、五音、七音、五音の定型のなかに「季題」を必ず取り入れるという決まりも守る必要がある。どの言葉がいつの季節を示すのかについては、定めがあり、「歳時記」で調べることができる。この決められた季節を示す季語を取り込むことで、「日本固有の文化や情緒」が作品に醸し出される。五音、七音、五音の構成を取ることで、日本独特の伝統的リズムが確保される。そして、「日本」での人間と自然の営みが詠み込まれる。

ということは、日本人が生活の拠点をアメリカに移し、そこで俳句を作る、ということは何を意味するのであろうか。アメリカの自然を前にして俳句を作る。20世紀半ばまでの日系アメリカ人史を振り返ってみると、日本人が歓迎されない、むしろ排斥される土地で俳句を作った。英語社会のなかで俳句を作った。日本人のコミュニティが社会の片隅に追いやられている状況で俳句を作った。「日本の固有の文化・情緒」が蔑視されている社会で俳句を作った。なぜなのだろうか。なぜ、「日本での人間と自然界の風物との脈々たる係り合いを詠う俳句」を、あえて異質な環境のなかでも作り続けたのであろうか。「日本」ではない「アメリカ」で、俳句を作り続けるという行為に、なぜ日本人はこだわったのであろうか。作り手にとって日本の伝統的俳句を作るという行為は何を意味したのであろうか。このような問題提起に、答えを出すことはできない。

ただ、こうした問題意識をもって、日本人がアメリカで俳句を作り続けた行為を見つめ直してゆきたい。

2）移民地の俳句として

人は移動するとき多かれ少なかれ荷物を持つ。こうした目に見える荷物の他に、人は目に見えない荷物も運んでいる。言語、思想、習慣、嗜好などというソフト面の荷物である。これらを「文化的手荷物」というが、その中には、正月には門松をたて、雑煮を食べ、お盆には盆踊りを踊るものだ、という日本の年間行事を続けたい心性や、子供には修身を学ばせる必要があるという教育観、ガマンやエンリョなどの道徳観も含まれる。俳句を作るという行為もそうした文化的手荷物の一つであった。

アメリカで誰が最初に俳句を発表したのか、最初の吟社はどこで生まれ、どのように活動したのかについては定かではない。藤岡無隠（紫朗）[5] の回顧によれば、オレゴン州には1904年ころに風土吟社が活動し、『央州日報』の社長阿部照洋（豊治）や三宅太朗[6]が指導していたという[7]。その後、シアトルに沙香会が生まれた。常連は、石垣和久良、高畠淡影（虎太郎）、初鹿野梨村、上田台陰、胎中大楠、菅野紫華郎、本多越民、松本春潮、池田石仏、深野春雨、大谷花郷、太田虹村、佐々木黄瓦洞、信濃太郎（河上清）、山中曲江、中川夜泊、他に、阿部照洋、竹内青巒（幸次郎）、桑原閑畝、片山風雲、山田鈍牛、諸岡紫紅、名取稜々、宮崎懐風、武田硯湾、翁六渓（久允）、富田緑風、入二峰、中村迷羊、庄司紫星、内地柳々、中心人物は、和久良、淡影、梨村、紫華郎だったという[8]。

シアトルの沙香会は、句会活動の記録が残る数少ない吟社である。『在米日本人史』や『米国西北部日本人移民史』[9] によれば、1903年から４年ころ、シアトル市に「シヤートル文壇」ともいうべきものが生まれた。当時数百名を数えたスクールボーイ[10]たちのなかの、文学好きが文芸同人活動を始め、その動きのなかから、沙香会も生まれた。

同会の活動を記した『俳句六年』[11] の年譜によれば、会の発足は1906年５月、石垣和久良、山中曲江、中川夜泊、松本春潮が発起人となり、料亭「うら梅」で会を始めたという。毎月の主な会場は、今も営業を続ける料亭まねきであった。1906年の10月には、内藤鳴雪に、11月には岡野知十に選評を求めている。日本の俳句の動向に敏感で、評価の基準を日本に求めていた現れであろう。掲載されている最古のものは、

陽炎の中に冷たし岩の鼻　　阿部照洋　1907年２月句会最高点
田を売つて田螺聞く夜となりにけり　　和久良　　同上

句の傾向は、上記のような伝統的な俳句から、次第に碧梧桐の影響を受け、1910年９月には「新俳句の趨勢日に激甚となり旧態より進み能はぬ俳人は封じられた観があつた」という[12]。９月には

雲の色描き様を花野暮るに来て　　梨村

具布令は明日田休めや夕鳴子　　越民

の句が記されている。そして、12年には、「成人振つた勢は是れから円熟せんとする最も楽しい時代に入つた。昨年末一部俳人間に季題撤廃の議が唱道されたが大した勢力とはならなかつた」と述べている。自由律俳句の影響が沙香会にまで及んでいた点が興味深い。

『俳句六年』発行の世話人だった佐々木黄瓦洞は、「巻尾の蛇足」で、「この種の実生活に余り関係のない雅会が歪みなり［ママ］にも六年間続いたのは、赤誠の薄い移民地では一寸珍とするに足つて［ママ］、同時に一個の宝物とも考へられる」と述懐している。当時シアトル市は、いくつかの鉄道の開通で急速に発展する新興都市で、世界から金儲けを目的に移民労働者が集まってきていた。人々の流動性は高く、金儲けに関係のない活動には関心が薄い。そうしたなかで、俳句という、自然諷詠を楽しむ会が、6年間も句会を続けられたことは、精神的オアシスのようで貴重である、と誇っている。「跋」では桑原閑畝が俳句を「詩趣を最も簡潔に表はすは、俳句あるのみ」と評価した上で、「卒先［ママ］之を米州に紹介せるは、実に沙香会也」と結んでいる。ここで、閑畝は、日本の俳句をアメリカに紹介しているのだと、会の活動を総括しているが、アメリカの俳句を生み出すのだという境地にまでは達していない。

3）アメリカの俳句として

今年創立80周年を迎えたレニア吟社は1934年2月川尻杏雨（慶太郎）を「生みの親」として、小池晩人（恭）を選者として、結成された。杏雨が俳句に親しむようになったのは、1931年、ロサンゼルスの橘吟社で俳句を学んだからだという[13]。その橘吟社は1922年12月に第一回句会が開かれたが、発足当時は、サンフランシスコの『日米』新聞を拠点とする蝉蛙会での好成績をめざしていた[14]。蝉蛙会は1913年6月頃、『日米』社内同好者、鳴山（佐々木勇平）、節子（半田太三郎）、東籬（重冨耕太郎）、虚人（高橋久蔵）、笛川（伊奈瀧蔵）、五堂（河西英治）、抜山（寺田一男）が集まって結成された。社内には青蛙会があり、その関係で、蛙を、最初の句会で「蝉」という課題から始めたので蝉蛙会と称した。一時停滞したが、1921年ころ復活し、後に橘吟社を興す常石芝青も射陽と号して投句するようになった[15]。1923年ころには、「北米唯一の俳壇として一百名に近い会員を有して」いるようになった[16]。

蝉蛙会は、1923年、寺田抜山編集、森素人（勇）選で『蝉蛙会句集』を出版した。会結成十周年記念、俳句募集200回記念の出版だという。投句者は、賞金が多いときには、メキシコやカナダ、ハワイからも投句があったという[17]。目次は、歳時記に従って、春夏秋冬、それぞれに天文、地理、時候、人事、動物、植物と分類されている。句は全86頁。同人は、97名の名前が記載されている。

常石芝青回顧によれば、「蝉蛙会を道場として俳句を始めたものは、句作の技術を身につけつつ、自分達の住んでいるアメリカの事物を取材して写生句を作ることに目覚めつつあった」という[18]。

陽炎や霜害しるき蜜柑苗　　射陽

ナイフ刺す土の温みやアスパラガス　　白萍

最初の句は、オレンジ郡と呼称されるほどの主要作物であるオレンジの苗を襲った霜害と、昨夜の寒さがうそのように暖かい陽が昇ってくる光景を写生している。写生ではあるが、霜害を嘆く農民の心情も伝わってくる。第二句は、まだ朝の冷気が漂うアスパラ畑の収穫風景の写生であるが、農民が土のぬくもりを手で感じ、これからの収穫の確かさを期待している様が読み取れる。身の回りの自然に取材し、自らの心情を詠み込んでいる。

ロサンゼルス市の橘吟社は、本間三海風によると、前身は常石射陽が幹事を務めた無花果会で、1922年の師走の日曜日で、射陽、白萍、海雀、三海風、霧山、周吉、蝶夢、松翠、秋洋で、

暖かや陽を仰ぎ立つ草の丘　　白萍
新居して庭に手入れや暖き　　三海風

などの作品が作られた。作品は、前述のように、『日米』で発表することと決められた。翌年5月には、桜井銀鳥も南下し、加わった[19]。

現在までのところ、「俳句雑誌　たちばな」の創刊号は未見であるが、2号をみると、常石芝青は、アメリカの俳句の確立を強く訴えている。「地方色に就て」と題する巻頭言で、芝青は、「加州にも地方色がある。だから、加州の風物に常に接触して居る我々は、不知、不識の間に、その環境の感化を受けつつあるのである」とカリフォルニア州にいることの意味を確認する。ということは、「かかる環境にあつて俳句に親しんで居る我々の作品に、米国色ともいふべきものが織り込まれて行くといふ事は、誠に当然すぎる程当然な事だと思ふ」と、カリフォルニアで作られる俳句には、カリフォルニアの自然が溶け込んでくるはずだと論じる。たとえ、カリフォルニアの作家の作品が技術的に劣っているとしても、「我々はこうして生まれつつある我々の俳句を限りなく尊重したい」と思う。「かかる俳句こそは個性ある作品と同様に真に価値あるものであると思ふ」からである。そして、「我々米国の自然を背景とし、其生活を基調とした俳句を唱導し、創造するに非ずんば、この渺たる俳誌の使命ははたして何処にありやと」と主張する。芝青にとって、「我々の立場を自覚し、我々に与へられたる特種の境地に心躍りつつ、我等の眼前に無限に開展せる、米国の原野を踏み込み、開拓の一ト鍬、二タ鍬を打ち下ろしつつある」ことを実践し続けることが重要であった。とはいえ、アメリカ色を強調することは、「毫もアメリカの趣味に偏するといふ事ではない。奇を好み、新を追ふといふ事でもない」と釘をさす。重要なのは、

米国の我々は、今一層大胆に米国の自然、風物を描写し吟詠すべきであつて、故国の人々にわかるわからぬかを顧慮すべきでない。大和民族の前衛として、太平洋の彼岸に踏み停つて居る我々はかくして俳句の領域を米国にまで押し広めて行き度いと思ふ[20]。

要するに、現実の自然を写生するというホトトギス派の基本に専心するのである。結果として、他者の思惑に右往左往することはない。いわば、アメリカの俳人の独立宣言ともいえまいか。

4）レニア吟社

レニア吟社は前述のように、1934年２月、川尻杏雨を提唱者として、小池晩人を選者として、『大北日報』を発表機関として発足した。『在米日本人史』によれば、レニア吟社は「汎米的な俳壇」だったという[21]。杏雨は、川尻の俳号で、別に北溟子とも号した。『故川尻北溟子追憶』[22] によれば、本名は慶太郎、1868年６月８日に鳥取県に生まれた。師範学校卒業後、1895年に明治移民会社バンクーバー支部書記としてカナダに渡る。ほどなくし、会社が倒産、1896年シアトルに移るが、新開地特有の荒れた風紀を嫌い、ポートランドへ下る。そこで新聞を発行していた経験を買われ、シアトルの『大北日報』編集主任となる。その後は、シアトルとロサンゼルスを行き来し、ロサンゼルス滞在中に橘吟社で俳句を始め、杏雨と号する。そして、前述のように、『大北日報』を発表機関としてレニア吟社を興し、小池晩人を選者に迎えた。その後、『北米時事』の顧問となり、レニア吟社の発表機関も同紙に移した。日米開戦の1941年12月７日に、病床からシアトル移民局に連行され、抑留所を転々とし、1944年４月25日、ミニドカ収容所にパロールされ、同地で11月26日死去した。「病むわれに人のなさけや日向ぼこ」が辞世の句として追憶句集に掲げられている。

選者である晩人は、内科医でもあり、山岳写真家としても世界的に高名であった。国際写真コンクールの審査員も務めたという。1878年に島根県に代々医者の家庭に生まれ、自身も岡山で開業した。妻を亡くした後、1916年に渡米。シアトルの日本町で開業した。シアトル写真倶楽部の指導的メンバーとして活動し、機関誌『濃淡』を発行し続ける傍ら、童話などを英訳し、またホトトギスにも投稿した。やがてレニア吟社の選者となった。ミニドカ収容所に収容され、1947年３月にシアトルで死去した[23]。

晩人も芝青と同様、「文芸の地方色」[24] で「文芸に於ける個性をいかに尊重す可きかは云ふに及ばないが、私は同時にその作品は地方色の濃厚なる可きを切望する」、と個性と同様に地方性も重視した。晩人は、アメリカに暮らす日本人の作品は、「生活その環境に触るる限り、それはそのまま母国日本の延長でなく、我等在留同胞独特の境地を背景とするものでなくてはならない」と主張する。この主張をホトトギス派のめざす花鳥諷詠の俳句に当てはめれば、「米国に住んで我等の環境を忠実に描写する限り、我等の作品は自ら濃厚な地方的色彩を帯びねばならない」ことになる。さらに晩人は、「云ふところの花鳥は独り自然の現象のみならず、人事も勿論これを含んで居る。客観描写を主眼とするものの、決して底深く流るる主観を否定せない」と論じ、自然を写しつつも、詠み手の感情も大切だと説いた。

さらに、『タコマ週報』に掲載された増田胡民（俳句）と村岡鬼堂（川柳、清）との論争に触発され、『北米時事』に「レニア吟社俳壇　俳句と川柳」を1941年９月５日から、７回連載し、俳句観を展開している[25]。まず自身の、

目刺焼く男所帯のひるは留守
冷奴女の愚痴を聞き流し

の二句を例にして、独身で食事はレストランで済ます生活、すなわち、目刺しを焼かない、妻の愚痴も聞かない晩人が、実体験に基づかない句を作ることは邪道であろうか、と問題提起する（9月5日）。

さらに、俳句では、季題の効果を活用するように助言する。たとえば、

牧の牛断えず尾を振り金鳳華

この句では、晩人によれば、季題の金鳳花は点景に近いが、季題は生きている、という。晩人の説明を補えば、句では、まず広い牧場が見える。続いて牛に、牛の尾へと目は移り、最後に金鳳華に目を止める。広大な牧場から小さな金鳳花に風景は凝縮されるのであるが、金鳳華という季題があることで、季節は春、牧場は青々としており、牛はのんびりしている光景が眼前に浮かんでくるのである。ほっとした気分になれる。季題を重視するとはいえ、晩人は、「私は季題中心を強ゆる結果として往々その作品が季題の説明に過ぎざるなきを恐れる」とも釘を刺している（9月6日）。

最後に中村草田男の「唯俳句は人事をさへ自然を通じて眺めるのに対して、川柳は自然をさへ人間を通して眺るところが違つて居る」の説を引用し、晩人も「亦無条件で」これに賛同する。そして、

日向ぼこ短く含むシガレット
就職の自信があつてシガレット

の二つを比べ、川柳と俳句との違いを例証する。

前者は、「日向ぼこ」という季題をもつ。その季題から「冬の或日の風暖かな日向に憩ふ一人の男」という想像が可能となる。「黙々として短かいシガレットを捨て惜んで吸ひ更けるのか、或は二三団の一人であり、無駄話をつづけながらの喫煙であるかも知れない」という連想が生まれる。で、「何れにせよ草田男云ふところの人事をさへ自然を通じて眺める俳句の立場を代表する」と、晩人は結論づける。一方、後者は、「独り俳句の季題を含まないといふ形式の相違だけではなく、ここでは就職確実と決つてほつとして心ゆくまでシガレットを味ふ男を中心とする。周囲の光景は室内であるか戸外であるか、夏であるか冬であるか、可なり想像の自由が許されて、自然をさへ人間を通じて眺める川柳の本領はこんなところにあるのではないかと思はせる」と解説する（9月9日、傍点原文）。説明を補足すれば、前者は、「短く含む」という言葉から、タバコを捨てようとしない人がいることがわかる。「日向ぼこ」という言葉から、タバコを吸い終われば、その場を去らねばならないのだろうと思わせる。休憩時間が終わってしまうのであろうという連想が働く。結果として、冬陽の温もりと休憩時間とを惜しむ人の心も伝わってくる。後者は、ゆっくりした動作で、タバコを深く吸って大きくはき出す、ゆったりした気分がタバコを吸う動作で伝わってくる。不況下であることを考えれば、吸う人物の自信と喜びが伝わってくる。

さらに、晩人は、映画のショットで説明を補充する。俳句の場合は、冬の風景を背景に短いシガレットを捨て惜しむ男の場面で、川柳の場合には、スクリーン一杯の大写しで、安心して煙草

を吸う男の感情表現が重要になる。

晩人の説明よれば、日向ぼこの作品は晩人自身の作である。彼は、禁煙30年、自分の自己描写ではない、こうした男を描写したのでもない、想像の作であるという。しかし何故か見慣れた光景だと思わせる。「日向ぼこといふ季題中心の作品でもない。短くシガレットを含むといふ人事がたまたま季題日向ぼこから描き得る背景と不即不離の関係にあつて極めて自然に環境が描写されて居るのである」、と俳句創作態度を示している（9月10日）。

晩人の指導のもとに、レニア吟社は『レニア句抄』（1938年）と『レニア句抄第二』（1941年）を刊行している[26]。『レニア句抄』の晩人の前書きによれば、レニア吟社への参加者250名、『大北日報』での掲載作品数は1万を超える。質的には目標に遠く及ばないとはいえ、レニア吟社の活動は、「乏しい移民文学の一分野として可なり重要な役割をつとめた」はずであり、この句抄は、「我等の足跡を顧みる」記念樹であると述べている。いくつかの作品を紹介すると、

定めなき友の居どころ賀状かな	白色
四方拝富士に似る山なつかしむ	月精
寒明けて日々の手入や苺畑	ゐく女
海麗日本や見ゆと岸に立つ	杏雨
修路夫のやすみ煙草や柳の芽	晩人
草萌や皆が持ちよる国料理	すみれ

白色の句は、日本人移民の特性、移動性の高さと母国の風習を守る生活態度、を端的に語っている。月精の句はタコマ富士と日本人移民が呼んだレニア山への敬愛を、ゐく女の句は夫と並んで働いた妻たちの姿を、杏雨は見えない日本を見ようとする望郷の念を詠んでいる。すみれが詠むのはお国自慢の手料理を楽しむピクニックの一コマであろう。晩人の句は写真を見るようである。工夫たちが一休みし、煙草に火をつけてほっとして、目を転じた先に柳の芽、もう春なんだなあ、という感慨が聞こえてくるようである。「柳の芽」という語が、春の訪れを憩う工夫のくつろぎ感を強めている。

第一から3年を経て出版された『レニア句抄第二』では、発表機関の変化だけでなく、参加者も変化しているという。質的には依然として発展途上ではあるが、それでも「我等の句境に光明のきざしあることをレニア吟社同人と共に喜びたい」、と晩人は記している。

初富士になぞらひ住みて世を祈る	秀女
持ちふりし田舎稼ぎの毛布かな	蘇村
日向ぼこ異人に離れ居るひとり	韋城
饒舌の妻と向ひてふところ手	俚汀
ヤキマ薯悲喜こもごもの豊の秋	青空

秀女が新年に祈るのは、日米の平和であろうか。蘇村が詠むのは、全財産を毛布に包んで各地の農場を転々としてきた、日本人移民労働者の老いである。毛布はいわば相棒、「毛布かな」と

いう言葉に、愛着を感じる。韋城の句は、毛布がよれよれになるまでの長い期間アメリカに暮らしながらも、なお周囲の人々を「異人」と呼び、「ひとり」離れている日本人の疎外感が感じられる。俚汀（山中義久）は、家族持ちには家族持ちの苦労があることを詠んでいるが、思わず笑ってしまう。青空は、ヤキマインディアン居留地に日本人コミュニティがあったヤキマ地方の農民の複雑な心を詠んでいる。

5）強制収容所の作品

レニア吟社の作品では小池晩人編『草堤』（ミニドカ吟社1945年）を忘れることはできない。発行はミニドカ吟社であるが、その主要メンバーはレニア吟社の人々であった。晩人による「選句を終りて」によれば、1945年４月までに作家158名、万を超える作品が作られ、そのなかから、作家133名、1139作品を句抄に採録し、200部作成したという。この句集は、特異な収容所生活のなかで作られた俳句集であるため、「内容はそれぞれ我等がキャンプ〔収容所〕生活の所産を中心とするので環境の然らしむところ、その色彩極めて濃厚なることが特徴の一つである」、と晩人は分析している。そして、「私たちは全く母国俳壇との連絡を断たれ、仰ぐに師なき荒野の迷洋なるが故に、どこまでホトトギス俳句の大道を踏み誤らなかつたかに確乎たる自信はない、が、他日云ふところの米国俳句を母国のそれと比較研究するに当つてこの句抄は逸してならない資料の一つであると考へる」、と収容所生活を写した句集としての価値を指摘している。題名は、「ミニドカ風景の生命線であり、その草堤はいつも我等が俳諧道場なるが故」に「草堤」としたという。

普段着の母に暮れたるお元日	森本糸女
雪解みち踏み来し人を懇ろに	藤岡無隠
耕すや底までまじる貝の屑	矢野紫音女
トラックの通るがほどの麦の道	山根一舟
征く吾子につましき馳走鮪鮓	丸山貞子
短夜のニュースはげしく皆黙す	安井亜狂
貝細工日もすがらなるろ邊の妻	林秋夕
霜の扉に更けし飛電や吾子戦死	藤岡細江
人の子の霊を抱きて山眠る	矢野紫音女

糸女の句は、元旦に母が普段着だった姿を、無隠は雪解けの道を来てくれた友人をもてなす気持ちを詠んでいる。表面的は、どちらも何気ない句である。しかし、前者では、戦前母は毎年豪華な正月料理を用意し、最上の晴れ着で元旦を迎えていた、という前提がある。常ではない普段着姿を見る作者の心情は複雑である。後者では、収容所は１万人を収容する広大な敷地であったが舗装されず、車もない、歩かざるを得ない交通事情を前提としている。雪解けのぬかるみを友人がはるばるやってきてくれたのである。「懇ろに」という言葉には、友を歓迎するだけではない、被収容者間の苦しみの共有感がある。そして逆境でこそ身に沁みる人の温かさが感じられる。音女の句は、耕しても、耕しても出てくる貝殻へのあきらめのようないらだちが伝わる。その邪

魔者の貝殻を使って、冬、女たちはブローチや造花造りに熱をあげた。その夢中な姿を秋夕は温かい目で見守っている。一舟の句は、音女とは反対に、びっしり耕作され美事に実った麦畑を誇る気持ちが伝わる。亜狂は短夜という季題から、時期的に沖縄戦であろうか。アメリカを永住の地と選ぼうとも、日本を案ずる日本人移民の沈痛な想いが伝わってくる。細江は我が児の戦死の報に愕然とする母の衝撃と哀しみを、紫音女は、次々と戦死の報が届く収容所の親たちの、あきらめの心を静かに詠んでいる。

ツールレーキ吟社から1943年に刊行された『記念俳句集』はレニア吟社の主要メンバーであった安井亜狂と林秋夕の選句である。俳句は、新年、春季、夏季、五十会例会兼亜狂（政太）全快紀念句会、パインデール同人歓迎句会、右答吟、秋季、亜狂の病床へ寄書、岩山吟行句、冬季、入院の亜狂に菊を贈る、右に答へて、の順に配列され、87頁である。1942年6月にツールレーキ収容所に収容されてから、晩人の指導を仰ぎつつ、1年2ヶ月の間に句会60余回、作家36名を数え、作品1万余となった。ツールレーキ収容所が、隔離収容所になるにあたって、メンバーが散り散りになるので、句集として纏め記念としたのだという。

配られし餅二つ三つお元日	九峯
春泥や薪並べたる厨道	日章
春愁の語らひ征きし子に及び	秋夕
春愁や久しく絶えし子の便り	秋峯
戦の果つる日知らず苗木植ゆ	貞子
マーブルの子にバラックは小春なる	秀女
餅好きの吾子なりければ陰膳に	秋夕
手作りの下駄こつこつと凍し道	草湖

九峯の句は収容所で迎えたはじめての正月であろう。餅が配られるだけでよしとしたのか、たったこれだけかと思ったのか、九峯はどちらだったのであろうか。日章（米岡太）や草湖は、不便きわまりない収容所生活を淡々と詠んでいる。秀女が詠むように、秋の日差しのなかでこどもはマーブルだけでも愉しそうに遊ぶ、なごやかな光景である。とはいえ、戦争である。戦局はわからない、シカタガナイと思う気持ちを貞子が、出征した子を想う親の心を秋夕、秋峯が詠んでいる。

安井亜狂は、また、息子英夫の戦死の報に各地からおくられた追悼句をまとめ、『逆縁』を1945年に出している。父亜狂は、「パープルハート〔紫心章〕とその覚書は言はばお前の二十五年の生涯のデプロマとなつた」と、母秀女は、「人目も恥ぢず、おん前に泣き崩れて神よ、いつまでも英夫の上に加護あらせ給へとひたすら英夫の冥福を祈るのであります」と述べている。その哀しみを、

寒燈を点じて老ひの忌籠	安井亜狂
菊の塵掃いて逆縁忌籠	安井秀女

と詠んでいる。追悼句には

輝けるおん面ざしや冬の星	藤岡細江
母の手にかへる日もなく秋更くる	原野菊
フランスの枯野の血汐苔むすや	小池晩人
木枯や子の訃にこもる畏友のいかに	毛利白龍
霜寒し膝にしみ込む涙かな	左右木韋城
冬灯やただならぬ世のさかさごと	関谷赤江女
軍服のうつし絵悲し菊の壇	臼田葉子

などがある。

最後に『北米ホトトギス入選句集』に掲載されたレニア吟社同人の句をいくつか紹介する。1916年の句は、ホトトギスに入選した最古のアメリカからの句であるという。

1916年　プラサビール駅	
雪に灯す谷底の町汽車着けり	鳴人
1936年	
住み古れぼ人種別なし墓参	森脇志一
1937年	
蝶流れテニスの娘等の身も軽く	志一
ダム工事人蟻のごと働ける	晩人
1938年	
日を限る夜業に電話なりつづけ	晩人
卒業ガウンよく似合ひ打並び	志一
1939年	
身に入むや日本を遠く離れ住み	晩人
冷奴女の愚痴を聞き流し	晩人
1941年	
ものみなの豊かに住めり感謝祭	安井秀女
戦雲をよそに種子蒔き老移民	林秋夕

おわりにかえて

レニア吟社は80年の歴史をもつ。その間に、日米関係の悪化、第二次世界大戦、強制立ち退き収容、二世の日本語離れ、といくつもの途絶の危機があった。それでも、新しい詠み手が加入し、ホトトギス派俳句の伝統を継承しつつ、新しさも加えている。本稿では、戦前の句集を中心にレニア吟社の歩みを顧みた。戦後の『しゃくなげ』などには触れていない。これは稿を改めたい。

俳句は日本の文学的伝統、そして日本の自然や社会と密接な関係をもつ。底辺の広がりは大き

く、日本人で俳句を知らない人はいない。民衆詩、国民詩と呼んでもよいだろう。とはいえ、橘吟社やレニア吟社の活動を振り返ると、作者の生活から生まれる発見や感動を十七文字で表そうとする心情は、作者が何処にいるかを問わない。アメリカの環境のなかで俳句を作ることは、俳句を作ろうとする気持ちであればその居住地は問題とならない。

アメリカの俳句はすでに存在する。個人として俳句を作る行為とは別に、アメリカ俳句の活動母体の一つであるレニア吟社の伝統を継承し発展させてもらいたい。80年記念の『しゃくなげ第二集』にとどまらず、是非、90年、100年と継続し、アメリカ独自の俳句を世に顕してほしい。

注

1．本稿は、2014年8月23日、ワシントン州日本文化会館（Japanese Cultural and Community Center of Washington）で行われたレニア吟社80周年記念講演会基調講演をもとにした。紙面の都合上、大きく削除したうえで、加筆修正したものである。
2．http://www.hototogisu.co.jp/　2014年7月5日アクセス。
3．http://www.haiku.jp/haiku/index.html　2014年7月5日アクセス。
4．同上。
5．本稿では、俳号を使う。資料によっては、俳号のみが記載され、本名がわからない場合の方が多いからである。（　）内が本名である。無隠（1879-1957年）は青森県出身、シアトルからロサンゼルスに転じ、日本人会幹部としても活躍したジャーナリスト。
6．三宅太郎『虚子選三宅太郎記念句集』ホトトギス社、1937年がある。
7．大場砂丘によれば、阿部照洋、高畠淡影（後シアトル日本語学校長）、成沢玲川（帰国後朝日新聞）、初鹿野梨村、安倍鉄肝（新聞社員）、伴紫白、中川夜泊（新聞）、船串蓼太（洋服屋主人）伊藤紅雨、三宅他朗（のち太郎）、守矢自由也らの名前が挙げられている。「風土吟社の追憶」『たちばな』1948年4月号5-6頁。風土とはHoodの当て字で、オレゴン州ポートランド近郊のコロンビア川沿いにあるHood Riverという地名に由来する。
8．藤岡無隠「北米俳壇の回顧」『たちばな』1948年4月号、3－4頁。
9．在米日本人会事跡保存部『在米日本人史（1940年　復刻版）』（ＰＭＣ出版　1984年）；竹内幸次郎『米国西北部日本移民史』（大北日報社　1929年）。
10．アメリカ人の家庭に住み込みで働く。朝と夕方と週末に家事の手伝いを行い、昼間は公立学校に通うことができる。スクールボーイといっても、日本で中学校を出ており、当時としては、高学歴である。木山義喬『漫画四人書生』では、彼等のアメリカ生活がおもしろおかしく描かれている。
11．沙香会「俳句六年」編纂所『俳句六年』（シアトル市田辺印刷、1912年）。本書は、1913年川尻北溟（慶太郎）が下山逸蒼（英太郎）に贈り、下山から1930年片井渓巌子に与えられたもの。その後、下山逸蒼の弟四郎に送られ、下山家から盛岡市先人記念館に寄贈された。
12．同上、9頁。
13．橘吟社入会の経緯に関しては、川尻杏雨「俳句を学んで感じた事」『たちばな』6巻3号、1933年1月号、23-25頁。
14．常石芝青「北米俳壇の推移（二）」『南加文芸』1969年3月号、85頁。
15．常石芝青「北米俳壇の推移（一）」『南加文芸』1968年9月号、73頁。寺田抜山「蝉蛙会の事ども」『たちばな』1948年10月号、18-20頁。
16．三苫怡土雨「序」『蝉蛙会句集』1923年蝉蛙会、V頁。
17．森素人「序」『蝉蛙会句集』1923年蝉蛙会、VI頁。
18．常石芝青「北米俳壇の推移（一）」75頁。
19．本間三海風「橘吟社略歴（一）」『たちばな』1926年10月号10-11頁。
20．常石芝青「地方色に就て」『たちばな』1926年10月号1-2頁。

21. 『在米日本人史』717頁。
22. 増田胡民による「序」は1944年12月 7 日に記載されている。World Cat 検索では1944年発行とされている。奥付はなく、発行所などは不明。活字印刷されている。おそらくはミニドカ収容所でミニドカ吟社によって発行されたと思われる。
23. 渡米は1917年と記載されるものもあるが、WRA のデータでは1916年となっている。詳しくは、レニア吟社1948年発行の『早蕨』「輯を終りて」、および David F. Martin and Nicolette Bromberg, *Shadows of a Fleeing World, Pictorial Photography and the Seattle Camera Club,* University of Washington Press, 2011, 53-55.
24. 小池晩人「文芸の地方色」『収穫』 5 号、1938年10月号、28-30頁。『収穫』は1930年代なかばに、在米日本人文芸愛好家によって発行された総合文芸雑誌であった。復刻出版もある。同誌については、篠田左多江、山本岩夫共編著『日系アメリカ文学雑誌研究』不二出版、1998年の同誌解題参照。
25. どのような論争であったかについては、未見である。
26. どちらもレニア吟社編、発行である。

本稿で利用した資料の閲覧に関しては、2010年度〜2012年度日本学術振興会科学研究費基盤研究（C）22510276「南北アメリカ移民地短詩型文学の発掘保存と社会史的活用に関する基礎研究」、2010年度〜2012年度 JICA 横浜海外移住資料館学術研究費「海外移住資料館所蔵文献資料の拡充と学術的活用の探究」、2013年度〜2014年度白百合女子大学学内研究奨励費「アメリカ合衆国強制収容所における日本語文学作品の発掘・保存・分析」の助成を受けた。